

# 少年少女 やまがた人物風土記

13

## 志田周子―山村の女医(上)

### オリオンのもと

### 雪路を踏みて



**無医村のふるさとへ帰る**

「よいしょ、よいしょ。それ、はやぐ」  
20、30人のかけ声が、吹雪の山にこだま  
してはかき消されていく。ひと晩で、1  
メートルも積もった新しい雪。かんじ  
き(雪の中へふみこまないようにはく、  
輪の形をしたもの)をふみしめても、  
道(みち)をふみはずすと、胸(むね)のあたりまで雪の  
中(なか)へめりこんでいく。

つけでな  
村(むら)の人は、周子(しゅうこ)をも気づかなくて声をかけ  
た。車の通れる道(みち)まででさえ、30キロ  
もある。吹雪(ふぶき)の中(なか)、町の病院(びやういん)へ向(む)かっ  
て、周子(しゅうこ)と村(むら)の人(ひと)たちのひくそりは急(いそ)い  
で行(い)く。

周子(しゅうこ)のふるさと、山形県大井沢村(やまがたけんおおいさわむら)(現  
在(ざい)の西川町大井沢(にしがわまちおおいさわ))は、月山(つきやま)と朝日岳(あさひだけ)の  
中間(ちゅうかん)にある山村(さんそん)で、毎年(まいとし)3メートル以  
上(じょう)の雪(ゆき)でうずまる。その雪(ゆき)が消(き)える

「しっかりしろ！」  
村人(むらびと)たちの口々(くちぐち)にさけぶ  
声(こゑ)。急(いそ)ぐそりの中(なか)には、毛  
布(ふ)にくるまれた病人(びやうじん)が苦  
しさをこらえている。

「さむくないが。がんばっ  
てな。病院(びやういん)では手術(じゆじゆつ)の用  
意(い)して待(まち)っててくれっだん  
だから」

そりにつきそって、はげま  
し続ける(つづ)るのは、女医(じよい)の志田  
周子(しゅうこ)である。かんじきに足  
をとられ、ときどきころび  
そうになりながらも、病  
人の顔(かほ)から目(め)をはなさな  
い。

「先生(せんせい)、だいじょうぶが。  
だいじな先生(せんせい)だから、気(き)

のは5月末(がつすえ)である。  
その当時(たうじ)の大井沢(おおいさわ)は、人口(じんこう)が千人(せんにん)。山  
の間の田畑(たはた)からは、自分(じぶん)たちで食(た)べる  
分(ぶん)しかとれず、炭焼(すす)きや出(で)かせぎで暮(く)  
しを支(さ)えていた。山形市(やまがたし)からは60キロ、  
三山電鉄(さんざんでんてつ)(左沢線高松駅(ささくせんたかまつえき)から間沢(まざわ)  
の電車(でんしゃ)の終点(しゅうてん)である西川町間沢(にしがわまちまざわ)から  
でさえ、23キロメートルもはなれていて、  
「陸(りく)の孤島(ことう)とくに交通(こうつう)の不(ふ)便(べん)なところ」  
といわれてきた。そんな村(むら)だから、来(き)て  
くれる医者(いしや)なんかいるはずがない。大井  
沢(さわ)は長いこと「無医村(むいそん)」だったのである。

医者(いしや)に診(み)てもらえないで死(し)んでしま  
う村人(むらびと)の多いこと(おほ)がくやくしく、かわいそう  
でならなかったのは、当時(たうじ)、大井沢小  
学校(がっこう)の校長(こうちょう)をしていた周子(しゅうこ)の父(ちち)、莊次(そうじ)  
郎(らう)だった。周子(しゅうこ)はその強い願(ねが)いを受けて、  
東京女子医学専門学校(とうきょうじよいがくせんもんがっこう)(現在の東京女  
子医科大学(じよいかだいがく))に入(い)学(がく)し、女医(じよい)としての  
道(みち)をすすむことになった。

女子医専(じよいせん)を卒業(そつぎやく)し、その付属病院(ふぞくびやういん)に  
勤務(きんむ)していた周子(しゅうこ)のもとへ、父(ちち)がたずね  
てきたのは1935(昭和10)年(ねん)の春(はる)  
のことだった。医師(いし)として、もっと勉  
強(きやう)を続(つづ)けたい、東京(とうきょう)とのわかれもつら

いという周子(しゅうこ)の気持(きもち)がわかっていている父  
は、  
「3年(ねん)だけでいい。大井沢(おおいさわ)へ、村(むら)の人(ひと)  
のために帰(かえ)ってきてくれ」  
と、さとうすようにたのむのだった。  
その年の6月(がつ)、父(ちち)からの手紙(てがみ)で、周子(しゅうこ)  
は村(むら)へ帰(かえ)る決心(けつしん)をした。上野(うえの)から奥羽線(おううせん)  
の夜行列車(やこうれつしゃ)に乗(の)った周子(しゅうこ)はこれから帰(かえ)  
ふるさとと、東京(とうきょう)の両方(りやうほう)を思(おも)いうかべ  
てなみだぐんでいた。

山形駅(やまがたえき)から、左沢線(ささくせん)、三山電鉄(さんざんでんてつ)、バ  
スと乗りつぎ、月山(つきやま)に着(つ)くと、父(ちち)が待  
っていた。ここから10キロの道(みち)は歩(あ)り  
かない。大井沢(おおいさわ)にたどりついたのは、夕  
暮(ゆぐ)れ近(ちか)かった。朝日連山(あさひれんざん)の緑(みどり)、古(ふる)びた  
木の橋(はし)、何(なん)十年(ねん)ものすすで黒光(くろくわ)りする家(いえ)、  
うすぐらい電燈(でんとう)。なにもかもが子(こ)どもの  
ころのなつかしい思(おも)い出(で)、自然(しぜん)豊(ゆた)かなふ  
るさとではあったけれども、とりかこむ  
山(やま)々(やま)々(やま)向(む)ける周子(しゅうこ)の顔(かほ)はひきしまつてい  
た。「明日(あす)から、ここは無医村(むいそん)ではなく  
なる。その責任(せきにん)はみな、わたしの肩(かた)にか  
かっているのだわ」  
周子(しゅうこ)24歳(さい)のときである。  
(つづく)

### 山村の女医 志田周子



1910(明治43)年 西村山郡左沢町(現大江町)に、父莊次郎(おとう)母せい(はは)の長女(ながむすめ)として生まれる。  
1914(大正3)年 父(ちち)が故郷(こきやう)である大井沢(おおいさわ)小  
学校(がっこう)となり、一家(いっか)は大井沢(おおいさわ)に帰(かえ)郷(きやう)。  
1924(大正13)年 県立山形第一女学校(けんりつやまがただいいつじよ  
りやう)入学(がく)。  
1928(昭和3)年 東京女子医学専門学校(とうきょうじよいがくせん  
もんがっこう)(現  
東京女子医科大学(とうきょうじよい  
がく))入学(がく)。  
1933(昭和8)年 同校(どうがう)卒業(そつぎやく)、医師免許(いしめんきょ)取得(とく  
り)、同校(どうがう)付属病院(ふぞくびやういん)医局(いぶく)勤務(きんむ)。  
1935(昭和10)年 大井  
沢村診療所(むらむらぢやうりよ)医(い)、校医(がうい)

とる。  
1938(昭和13)年 母(はは)せい、死(し)去(さ)。  
1942(昭和17)年 山形県医師会(やまがたけんいしかい)より表彰(たうひやう)され  
る。  
1947(昭和22)年 大井沢村議会議員(おおいさわむらぎ)当選(たうせん)。  
1950(昭和25)年 父(ちち)莊次郎(おとう)死(し)去(さ)。  
1956(昭和31)年 県知事(けんちじ)・県教育委員会(けんきやうくわいぎんかい)より  
表彰(たうひやう)される。  
1959(昭和34)年 第11回保健文化賞(だいじゅういちかいへんけんぶんかしょう)を受  
賞(じやう)。  
1962(昭和37)年 県立山形病院(けんりつやまがたびやういん)入院(にゅういん)(5月1  
日、東北大学医学部付属病院(とうほくだいがくいがくぶふぞくびやういん)に移(うつ)る(5月11日)。  
7月18日夕(ゆふ)、死(し)去(さ)。満51歳(まんごじゅういちさい)。

### 少年少女やまがた人物風土記

(1986~1990年に計5巻発行、各巻20人ずつ計100人を紹介)

■編者 山形県小中学校校長会、県小中学校教育研究会学校図書館部会  
■編集・執筆 県内の学校教諭、教育関係の皆さん  
■さし絵 小林秀美さん、鈴木慶夫さん(ともに白鷹町出身)  
■発行 山形教育用品株式会社(山形市)  
※本紙では、新聞表記の基準に合わせて表記を手直し、再編集している所があります。